西光寺だより

第十九号　平成二十四年三月一日発行

沈丁花の香り漂う三月となりました。少しずつ寒さが和らぎ、ゆるやかな春の陽射しを感じられる日も多くなってまいります。

日本には、「ひなたぼっこ」ということばがありますが、ぽかぽかと暖かい陽のぬくもりは、幼いころ母に抱かれていたようにわたくしたちを包んでくれているような気がしませんか。ふうわりと優しい気持ちにさせてもらえます。

皆様は、柴田トヨさんという方をご存じでしょうか？

九十九歳で「くじけないで」という詩集をだされた栃木県在住の詩人の方です。その詩集の中に次のような詩があります。

さびしくなったら

さびしくなった時　戸の隙間から　入る陽射しを
手にすくって　何度も顔に　あててみるの

そのぬくもりは　母のぬくもり

おっかさん　がんばるからね
呟きながら　私は立ちあがる

トヨさんはご主人を亡くされてから一人暮らし二十年、詩を書き始めたのは九十歳を過ぎてからだそうです。いくつになっても人間は、ぬくもりを感じることで前に進むことが出来るように思います。この詩をとおして、ぬくもりはいつもすぐ傍にあることに気づかせていただきました。まるで阿弥陀さまのお慈悲のように感じます。

◆四月・五月の行事◆

・四月　一日（日）　**春季永代経法要・追弔会**
　午後二時・七時　西光寺本堂
　・御講師　巖水　法乗　師（浄覺寺住職）
※なお、追弔会は一時三十分より厳修いたします

・四月　八日（日）　**花まつり（灌仏会）**
　午後二時より　西光寺本堂

・五月十二日（土）　**摂津十二日講御消息披露法要**
　午後一時より　西光寺本堂

●今月のことば●

「倶会一処（くえいっしょ）」

『阿弥陀経』のなかに「倶会一処」ということばが出てきます。これは「ともに一つのところで会える」という意味です。

一つのところ、とは極楽浄土のこと。阿弥陀経はお釈迦さまのお説法を記したものですが、極楽浄土のすばらしい様を宝の並木や池、鳥や風の音などで示されています。

お寺の本堂は、極楽浄土をそのまま表したものであることをご存じでしたでしょうか。そして、皆様のお仏壇は、お寺の本堂と同じ空間を小さくしてつくったものです。お釈迦様が示された極楽浄土（御本尊である阿弥陀如来の光輝く光明無量世界）が、そのままお仏壇に表わされているのです。

お釈迦様は次のように説かれています。「舎利佛よ、このように尊い浄土のありさまを聞くものは、ぜひともかの国に生まれたいと願うがよい。そのわけは、かような多くのすぐれた聖者たちと、共に一処に会うことができるからである。」

ここでいわれるすぐれた聖者たちのことを、尊敬すべき人たち、信仰の厚い人たち、親しいひとたち、愛しい人たちと解している学者がおられます。亡くなられた会いたい人たちといずれ一つのところで会える、とお釈迦さまは説かれているのです。

一度、ご自宅のお仏壇をゆっくりとご覧ください。そして、個々で機会をつくって西光寺の本堂にもお越しください。そこは、極楽浄土そのものの世界です。いずれ誰もが、その世界の中で自分にとって大切な人たちと会うことができるのです。

そして、もっといえば、うらみ憎むものも愛しいものもわけへだてすることなく、いつくしみ慈愛のまなざしでみることが出来るのです。わけへだてすることがないのが仏さまの智慧であります。それが倶会一処の世界なのです。

✐あとがき✐

春季永代経法要は先に亡くなられた方に対しての追善（追って善いことをする）の意味ではなく、故人を縁として寺院に参詣し、故人を偲ぶとともに、自分自身が仏法聴聞を重ねていく機会として営まれます。

そして花まつりは、お釈迦さまの誕生した日を記念した法会です。花御堂にまつられた誕生仏に甘茶をそそぎながら祝います。

今年の試みとして花まつりに関する紙芝居もしたいと考えております。甘茶かけや紙芝居をとおして、子供たちにもお釈迦さまの誕生を伝えていけたらと思っております。

ご門徒の皆様はもちろんのこと、どなた様でもお参りください。お子さまもご一緒いただければ嬉しく思います。皆様のご参拝をお待ちしております。

※お詫び

「西光寺だより十八号」にありました春季永代経法要の日程ですが、三月三十一日（土）午後二時・七時と載せていましたが、御講師の先生の都合により翌日の**四月一日（日）午後二時・七時**に変更とさせていただきました。急な変更につき、お詫び申し上げます。

なお追弔会は午後一時三十分からとなります。

合　掌

浄土真宗本願寺派　白毫山　西光寺
大阪府茨木市西河原一―七―二一
電話　〇七二―六二二―四七九四
FAX　〇七二―六二二―九二九二
http://www.osaka-saikouji.net/